

## 山北町立山北中学校

研究テーマ：山北総合プランづくり～汎用的な山北SCの活用をめざして～

### 1 実践の目的

本校では、昨年度より教科・総合的な学習の時間・特別活動・道徳科等さまざまな場面で山北スタンダードカリキュラム（以下、山北SC）を取り入れた学習に取り組み、生徒の資質・能力を高めることをめざしてきた。4月の全国学力・学習状況調査の質問紙からは、「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫する」「地域や社会をよくするために何かしてみたい」という項目に対し、否定的意見が4割程度あるという課題が見られた。その結果も踏まえ、今年度、総合的な学習と各教科・領域等を相互に関連付け、学校全体で問題解決能力を育むカリキュラムの構築に取り組むこととした。

### 2 実践の内容

#### (1) 学年縦断を意識した総合的な学習の時間の構成

本校の総合的な学習の時間では、単年度で完結する探究ではなく、学年の発達段階に応じて、調べる：「地域を見る視点」、深める・広げる：「他者の取組から学ぶ視点」、発信する：「自分たちの考えを構想・表現する力」が段階的に育つよう、学年縦断型のカリキュラムを構成している。

1学年では、まず「山北町を知ること」を学習の中心に据えた。山北町が掲げている総合計画を資料として扱い、班ごとに担当分野を決め、町が現在どのような取組を進めているのかを調べる活動を行った。その結果、生徒はさまざまな気付きを得て、地域

を見る視点の基礎が形成されていった。

2学年では、地域で実際に活動している人々の取組に目を向ける学習へと進めた。商工会の方々の取組を知る活動を通して、地域課題に対して大人がどのような工夫や努力を重ねているのかを学んだ。この学習を通して、生徒は「自分たちの考えが現実とどう結び付くのか」「自分たちにできることは何か」という視点を持ち始め、課題解決を自分事として捉え直すようになった。

3学年では、これまで培ってきた地域理解や問題意識を基に、探究を統合する段階として学習を構成した。3年間の「調べる（町の現状や課題を整理する）」「深める（現場の人へのインタビューを通して考えを深める）」「発信する（Webニュース、新聞社、広報作成者から発信方法を学び、文化祭で発表する）」という過程を経て、生徒一人ひとりが「山北町の産業を活性化させる提案書」を作成した。この作文課題をパフォーマンステストとして位置付け、当該学年の総合的な学習の時間の修了とした。

#### (2) 教科・道徳・特別活動との関連

教科や道徳の授業では、山北SCを活用し、話し合いを通して考えを深める場面を意図的に設定してきた。単に意見を出し合うのではなく、「なぜそう考えたのか」「他の考えと比べてどうか」といった問い返しを重ねることで、生徒が自分の考えを見直すようにした。こうした積み重ねが、地域の特色を根拠として因果関係を考えたうえでの解決に向けた提案につながると考えた。また、特別活動では話し合いを通じた合意形

成や意思決定の場面を大切にしたい。個人の提案を集団の考えへと高めていく土台となることを想定した。

### (3) パフォーマンステストの実施

8月の校内研究全体会で元帝京大学教職大学院教授 矢野英明氏に助言をいただきながら、総合カリキュラム全体の到達点を検証するためのパフォーマンステストの作成に取り組み、その後、学習グループで検討を重ねたものを実施した。評価は複数教員で行い、A・B・Cの三段階で総合評価しつつ、評価項目に該当する記述を抽出・分析した。作文型パフォーマンステストにより、取組の成果が生徒一人ひとりの思考としてどのように表出しているのかを確かめた。

### (4) 0歳から15歳までの一貫教育・保育

山北SCは町で0歳から取り組んでいるものであり、研究でもその積み重ねを意識している。また、「やまきた学びカリキュラム」を中心とした各分野のカリキュラムを実践したり、異校種間の交流を図ったりする機会を意図的に設けてきた。異年齢の存在は、生徒に「どのように伝えるか」「どのようにあるとよいか」という問いを生じさせ、自らの行動や表現を再構成する契機となった。また、園・小・中連携の成果は、アンケートの中の、一貫教育・保育で大切にしている「自己肯定感」に関わる質問で98%が肯定的な回答をしたことからも見られた。

## 3 実践の成果と課題

### (1) 成果

パフォーマンステストの作文を分析した結果、町の特色を踏まえた産業を挙げ、その活性化を図る構想が多くあった。これらは、地域理解や教科での話し合いを通じた思考の整理が反映された結果であると考えられる。視点をもって地域課題を捉える力が付

いたと言える。また、地域の特色と施策の効果を結び付けて説明しようとする姿が確認でき、因果関係を意識した思考の広がりもうかがえた。実際、町が抱える課題の解決はそう簡単ではない。しかしながらその困難さにも触れながら取り組む価値を見出しており、総合的な学習の時間だけでなく、各教科での学習、道徳科で扱った生き方や、学級活動での話し合いの経験を通して、粘り強く課題に向き合う態度が育まれたと考えられる。アンケートからも「地域や社会をよくするために何かしてみたい」と約90%の生徒が回答しており、意識の向上が見られた。

### (2) 課題

パフォーマンステストを通して、生徒の思考の差は、提案を構成する過程で生徒自身がどのような問いを自分に返していたかに起因している可能性が高いことが見えてきた。地域の特色と施策を結び付けた提案につながる深い学びとするためには問いの質を高める指導の必要性がある。今後は、教科や学級活動において、「よい問いとは何か」「問いをどう深めるか」を意識した指導を行い、総合的な学習の時間につなげたい。

## 4 今後の展開

本研究を通して、教科・総合的な学習の時間・特別活動・道徳科を関連付けた学年縦断型カリキュラムが、生徒の問題解決能力の育成に一定の成果を上げていることが確認できた。今回得られた成果と課題をもとに、各学年段階での指導内容をさらに精査し、問いの質や話し合いの深さを意識したカリキュラム改善を進めていきたい。また、パフォーマンステストを継続的に実施し、生徒の思考の変容を追跡することで、カリキュラムの妥当性を検証し続けていく予定である。